特集

再考！実習生の受け入れ

～ 実習生、保育者が育ち合えば、園の組織力が高まる ～

今、日本は、終わりの見えないコロナ禍。出生数も過去最少と少子化が進む中で、保育所等の利用数は毎年増加し、保育所の新設等、待機児解消対策が実施されています。量の確保とともに重要なのは、子ども一人ひとりを主体として尊重する保育、その質の確保・向上です。そこで求められるのが、質の高い保育を担う力を有する保育者の確保と人材育成です。保育者養成は、実習を核とし、理論と実践を往還しつつ、高い専門性の習得が基本です。必修である実習の体験が、学生の学びへの意欲、また保育者志向を高め、さらに、実習指導が、保育者の専門性、園の組織力を高めることにつながるようなあり方を、保育現場と養成校との協働、保育を楽しむ、対話を重ねるという新たな視点から再考しましょう。（増田まゆみ）

（座談会Ⅰ～Ⅲは、2021年7月に開催）

監修・企画／増田まゆみ
（湘南ケアアンドエデュケーション研究所）

企画／尾崎 司
（東京家政大学短期大学部・大学児童学科兼務）

小櫃智子
（東京家政大学子ども学部）

石井章仁
（大妻女子大学家政学部）

写真／ゆうゆうのもり幼保園❶❷、認定こども園こどもむら❸
千代田せいが保育園❹、あすなろ保育園❺、清華こども園❻

増田まゆみ（ますだ まゆみ）
湘南ケアアンドエデュケーション研究所所長。日本ムーブメント教育・療法協会理事。『保育ナビ』編集委員。元東京家政大学・大学院教授、第一・二・三次『保育所保育指針』改定委員、保育士養成課程等検討会委員などを歴任。日本保育学会、保育実習に関する自主シンポジウムを企画。著書に『保育園・認定こども園のための保育実習指導ガイドブック』（編著、中央法規出版）、DVD『協働する保育実習』（企画・監修、岩波映像）など。

実習生の受け入れについて私が思うこと

まず、座談会Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの前に、ご登壇いただきました方々からの“ひとこと”を紹介します。それぞれの思いを受け、これからの座談会を読み進めていただければと存じます。

「とても楽しい実習でした。保育がこんなに楽しいなんて知りませんでした。ぜひ保育者になりたいと思いました」と実習生が語った時、実習生を受け入れた充実感を覚えます。

この方は、現在、すてきな保育者になっています。

倉掛秀人先生
（社会福祉法人省我会　千代田せいが保育園 園長／東京都千代田区）

実習は資格取得に必須ということで、多くの実習生が緊張しています。短期間で見極めるのは困難ですが、生きがい・喜び・楽しさなど、多様な経験をしてほしいと思います。現場は養成校と協働して、将来の職業選択に夢と希望がもてる対応をしています。

高荒正子先生
（社会福祉法人福島愛育園 あすなろ保育園 園長／福島県福島市）

子どもたちは実習生が大好きです。実習生の一途さと、丁寧に寄り添う優しさを感じるのでしょう。実習生の存在は、現場の保育者の「保育心」もくすぐります。

初心にかえり、実習生と共に保育を見つめ直す期間が実習期間だと思います。

蒲池房子先生
（社会福祉法人松風会　幼保連携型認定こども園清華こども園 園長／長崎県島原市）

保育者不足が深刻化しているなかで、実習のあり方が問われています。実習を通して、実習生に学んでほしいのは、子どもと出会う楽しさや保育という仕事の魅力です。今や実習こそが人材発掘や人材育成の重要な場なのです。

渡辺英則先生
（学校法人渡辺学園 認定こども園ゆうゆうのもり幼保園 園長／神奈川県横浜市）

実習生の受け入れは、園の人材育成を考える大切な機会にもなっています。毎年、実習生との出会いは、園にとっても新しい保育の視点を学ぶ機会となり、共に育ち合う時間となります。実習で保育の楽しさを感じた学生が、今一緒に保育する心強い仲間となっています。

柿沼平太郎先生
（学校法人柿沼学園 認定こども園こどもむら 理事長／埼玉県久喜市）

私自身、大学時代の実習での子ども、保育者との出会いから、保育という仕事を選び、今の自分があります。実習が、学生さんにとって、子ども、そして多様な人との心動かされる、良い出会いの場となり、その後の豊かな生き方につながればと思います。

北林久仁子さん
（神戸市こども家庭局幼保事業課指導研修担当課長・元保育所長）

座談会 Ⅲ

人材育成としての実習指導
～園で実習生を受け入れる効果

登壇者

柿沼平太郎先生
（認定こども園こどもむら）

北林久仁子さん
（神戸市こども家庭局）

倉掛秀人先生
（千代田せいが保育園）

石井章仁先生
（大妻女子大学）

司会
増田まゆみ先生
（湘南ケアアンドエデュケーション研究所）

実習生の姿や気づきから園の保育を見つめ直す

倉掛先生：大事なのは、その実習生と、子どものことをとことん話し合う機会です。「どういうふうに考える？　見える？」。こちらも関心をもって実習生の状況に歩み寄って、質問しやすいような、対話ができるような関係をつくることを大事にしたいと思っています。子どもの姿から、同じように共感し合った喜びや楽しさ、それを大事にしていきたいと思っています。

　また、実習生が着目した子どもの姿に対して、もう一度、子どもたちが経験してきたことを思い巡らす機会は、実習生が来るたびに振り返りのきっかけになると感じます。いつもいる保育者だけでこういう振り返りは生まれません。

　実習生は、乾いたスポンジのようになんでも吸収していく。それだけに、こちらも何をどう語るか、背筋が伸びるような、ちゃんとしなきゃいけないなという気になります。

行政が支える、実習指導を通した人材育成の取り組み

北林さん：市の公立保育所は、いろいろと学び、保育を変えていきたいと思っている段階ですが、実習の受け入れについても、担当課長を中心に検討しています。

　実習の研修をして、参加者は実習の大事なところに改めて気付いたようでした。それぞれが、実習生の視点を学ばせていただきながら、責任実習をすることがゴールではなく、しっかりと話し合うこと、子どもを見て語り合うことを通して、保育が楽しいということを共有することが大事だと気付かされました。

　ある所長から、研修を受けた主任保育士が、実習生と、子どもの姿を通して語り合いたいと、実習を受けることを楽しみに張り切っているという話を聞いたところでした。

研修と実習指導を関連付ける試み

増田先生：園内研修も実習指導も根底に流れているのは、保育の基本である「一人ひとりを主体として認め、良さを認める」こと。良さを改めて認識し、より良くなるための課題を見いだすことが、主体として尊重し合う関係での実習指導につながります。今年度、園内研修のテーマに「実習指導」を入れたのですね。

Column

実習生の感想が、自分の保育に気付かせてくれる

　実習生を受け入れる時、実習生が実習を通して、「保育者になりたい」という思いで、実習を終えることが求められていると解釈しています。実習期間に実習生とどういうことを話し、考えたのかが、結果的に、保育の仕事をやってみたいという実習生の意欲につながると思って接しています。また、実習生の感想が、自分がしている保育について、気付かせてくれるように感じます。

（実習担当者／小林圭悟先生　千代田せいが保育園）

石井章仁（いしい あきひと）
大妻女子大学家政学部児童学科准教授。専門学校・短期大学・4年制大学で実習を担当。「保育実習指導者研修」講師（厚生労働省主催等）。著書に、『保育園・認定こども園のための保育実習指導ガイドブック』（共著、中央法規出版）、DVD『協働する保育実習』（制作協力、岩波映像）など。

何かな？　動かないね（ゆうゆうのもり幼保園）

柿沼先生：園で実習生を受け入れることを通して、子どもを中心に他者を尊重する、豊かな保育者が育っていくような仕組みができたらいいなという思いに向かって、第一歩を歩み始めたところです。以前は、自分の園を良くしようと強く思っていましたが、今、子ども、保育者、保護者、そして実習生を育てることが大切だという基本姿勢で園内研修を考えています。

　実習生が、子どもといる楽しさや保育の良さを感じる経験をしてほしい。その結果、実習生がその園で働きたいと思うような実習のあり方が大切ですね。

　実習生を大事にしていくと、保育者自身が育ち、園の中の環境や、子どもへのかかわりや保護者支援についても改めて学び、改善していこうという気持ちが生まれていると感じています。園長が保育者を大事にすることで、保育者の心に余裕が出てくるからこそ、もっと学びたい、環境をこうしたいと思うようになり、実習生に対しても、余裕をもって接するようになってきているのだと思います。

　実習生の受け入れを大事にしてきましたが、楽しい経験だけでもだめだし、きちんと学びたい学生へ、応えていかなければいけない。また、将来について迷いながら実習している学生についても、実習指導の多様な形があると思っています。

北林さん：市として増田先生による実習の研修を行って、実習指導について学ばせていただけたので、今まで自分たちが、形にとらわれていたことが違ったと、気付き始める職員が増えてきたことが大きかったです。

　研修には、公立だけでなく私立園の方にも参加していただいています。発信力のあるリーダー層が研修に参加し、園にもち帰り、どんどん語っているので、実習指導の研修は、本当に意味があると再認識しています。

倉掛先生：保育者だったら、その子どもに対しても、保護者に対しても、また保育者間においても、一人ひとりがもつ可能性を信じても、完全に一人ひとりに応じた対応は難しい。

　また、「実習指導者になった」という意識で取り組むと、自分の今までの経験から、「こうしたほうがいい」、「きちんと教える・教えられる」という、今まで経験してきたパターンについ引き寄せてしまう。

　実は、それらもそうしなくていいと解放できるのは、園長の役割だと思います。

　まずそこに気付いて、園長自らが職員との接し方も変える。コーチングやスーパーバイズなど、これまでいろいろな方法をとってきましたが、もっと柔軟にすべきだと思います。しかし、具体的にどのように対応するかはかなり難しいなと思います。

石井先生：保育者が学ぶ・学び合う姿を、実習生が垣間見ることは、大きな学びになると思います。特に、保育者が悩んだり葛藤したりする場面を見ると、学びがより深くなると思います。

　また、保育者は実習生にとってのモデルであるので、時に実習生はありのままを再現しようとします。実習生の気づきや姿からはっとしたりすることが、研修と結び付く要素として大きいと思います。

人材育成としての実習指導

増田先生：園長というお立場から、実習生とのかかわりの中で、人材育成と組織力の向上についてお話しください。

倉掛先生：実習を受けることは、保育士養成課程の一翼を担う大切な社会的役割があります。これまで大事にしてきた保育というのは、だれか

が決めた価値に盲目的に従うようなものではなく、そこで生活する子ども、保護者、保育者、地域の関係者らが民主的に対話を重ねながら、より良い社会を創造していく営みと重なり合うはずのものです。実習生もその主体者の1人であり、その営みに協働、参画していくこだと思います。まずは、そんな世界に「ようこそ」というメッセージと姿勢で受け入れるといいんじゃないでしょうか。

実習は、実習生の人生を方向付ける機会

柿沼先生：実習は、その実習生の人生を預かることだと思います。実習体験によって、保育が嫌だと思ったり、そこでいい経験をして保育者になったり。

保育の専門性は、きちんと伝えなくてはいけないし、保育や子どもを取り巻く社会の問題とか社会環境、または家庭環境、人口問題について、保育を通して、なんらかを感じて、それが子育て支援とか保育の形で現れることを少しでも理解し、保育の道に進んでもらえたらいい。たとえ保育者にならなくても、いろんなものを感じ、子どもの社会で見た世界を違う職場でつなげていくこともあり得ます。

実習を通して指導する側も、学ぶ側も育ち合う・学び合う関係が、実習期間にできて、実習を通して、保育者や私たち保育を営む側も、学べる機会になればいい。また、学ぶことによって、園の保育理念、方針等を全職員がどのように理解し、具体的な保育内容・方法につなげ、一人ひとりの力を出し合っているかの見直しにつながっていくと感じています。さらに、子どもの社会がより明るく、未来が豊かになると素晴らしいと思います。

北林さん：所長が職員を大切にして、人を人として尊重することが、合わせ鏡のように職員が実習生を大切にすることにつながっていく。それが保育所全体の雰囲気をつくり、また、社会の子どもに対するありようも変えていく。しっかりと一人ひとりを尊重していくこと、そこが全部つながっていることを、発信して、それが実習指導にもつながっていくことを伝えて、広げていきたいと思います。

一人ひとり、かけがえのない存在であることを、体験を通して理解する機会に

石井先生：「保育実習Ⅱ」では、「自己の課題を明確化する」というねらいが加わります。子どもとのかかわりを中心にして、実践の中で、自分の良さや課題に直面する行為は、現場に出た後も問われ続けるので、人材育成の取り組みとかなり近いと思います。

学生から保育者に成長するプロセスでどんな形に成長するかと考え、養成校教員がどう関与できるかが課題だと思いました。養成校が、卒業後もかかわり続けることが教員の学びになると感じ、今後、考えていきたいです。

増田先生：どの人も皆大事な存在で、互いに認め合う関係。温かで穏やかな関係性の中で育ち合うことがいかに大切か改めて認識しました。

一人ひとりの保育者の育ちが、組織力を高めていくことに気付くことは、学生にとって、共に育ち合う関係の大切さを実感し、後の人生の基盤になります。一人ひとり、かけがえのない存在であることを、実習体験を通して理解することの大切さを感じ取ることができました。

あっ、これは……（ゆうゆうのもり幼保園）

子どもが集まって（認定こども園こどもむら）

今後に向けて

保育現場と保育者養成校とが協働する実習へ

「実習体験」を通して、「保育っておもしろい」「もっと学びたい」「保育の道へ」という思いへ

教える・教えられる関係性を超えて、対話する実習へ

実習において、学生は学ぶ立場であり、保育者は指導する立場ですが、保育という営みに参画するという意味では対等です。

「教える、教えられる関係性」を越えて、共に保育を語り、思考することは、実習生にとっては保育の深い学びとなり、保育者にとってもまた専門性を高めることにつながります。

正しいことを保育者から教えてもらう実習ではなく、保育者と実習生が対話を通して共に育ち合う実習にできたらすてきです。

小櫃智子先生

成長する組織は、人の育成に真剣に取り組んでいる

3つの座談会に共通していたのは、実習生が子どもと出会い、保育者とその経験を共有するということです。実習生を送り出すと、実習受け入れは大変であるにもかかわらず、「私たちが勉強になります」、「次の保育者を育てる使命があります」と、自ら成長し、そして実習生を育てようとするスピリットを感じます。若い感性は、そうした匂いをかぎ分け、「自分を育ててくれる園を選ぶ」。そうした好循環が成長する組織をつくるのだと、今回、再認識できました。

尾崎 司先生

実習はキャリアの始まり 協働してその育ちを支える

キャリア発達の視点から見れば、入職後3～4年までは、まだキャリアの「探索段階」です。自分とは何か、社会でどう生きるかを模索しながら学び、就業します。なかでも実習の経験は、その後の保育者としてのあり方や生き方までも左右する重要な経験と位置付けられます。実習で意欲や関心が高まり試行錯誤できるよう、養成校と保育現場が協働しながら、個々の実習生のキャリアを支援するような実習教育を行うことを望みます。

石井章仁先生

終わりに ～協働する保育実習

特集を閉じるにあたって、保育者の人間性、専門性の豊かさとその高さが、保育の質に、また、園の組織力に強く影響することを、改めて確認したいと思います。保育所等が対象とする乳幼児は、この時期、心身ともに著しく成長・発達し、人間としての基盤が形成されていきます。どのような人が、どのような環境で、どのようにかかわるのか、その影響を強く受けて育ちます。周知の「就学前の保育の質が、その後の人生に大きく影響する」ことを、学生は実習で実感します。実習体験が、さらなる学びへの意欲、保育への関心の高まりにつながることが重要です。一方、保育者は実習生とのかかわりを通して「人を育てることは、自分自身が育つこと」だと気付くのです。実習指導が、保育者自身を高めることと、保育を担う人一人ひとりの力を活かし、育ち合い、協働する園組織へと変容していくのです。

さて、保育者養成は、保育現場と協働して取り組む実習を核として、学びを深め、専門性を高めることを基本とし、保育現場をはじめ、多様な場で重要な人材として活かされることをめざしています。協働する実習は、主体である子どもと保育者そして実習生とが生活を共にするなかで、「驚く心」をもって、子ども、そして保育のおもしろさ、奥深さについて対話を重ねる体験です。温かな認め合う関係性のなかで、学び続ける保育者の姿、組織力の高まりに気付き、保育にかかわろうという意欲が高まる実習が求められます。

増田まゆみ先生